

フィールド風

(現場)からの風

宮田守男

連日続いた大雪警報だが、スキー場関係者には物足りない降雪量だとの声が聞こえてきた。残る厳冬期、これ以上の雪や寒さはいら

ないと願う声も多い。俳優の高倉健さんは自著「旅の途中で」に「寒青という言葉をも大切にしたい」として、その理由に凍てつく風雪の中、他の木や草が枯れても松は青々と生きていく。『こんな厳しい中であっても、自分はこの松のように、青々と、そして活き活きと人を愛し、信じ、触れ合い、楽しませるようになりたい』と記述している。私たちも「松」を観て、そのように想える人で有りたいものだ。

今日は「季節の分かれ目」という意味を持つ「節分」。暦の上では冬から春へと季節が変わる節目の日だ。昔から、年や季節の分かれ目には邪気が忍び込むとされ、鬼を邪気の象徴として病や災害をはじめ人間の想像力を超えるような恐ろしい出来事を払おうと、豆

地域で行われる行事を 考える事は面白い

まきなどの節分の習わしが行われた。この風習は室町時代からの風習で、邪気を払う豆は、仏を守護する毘沙門天が、鬼の弱点、目を狙え。豆は「魔目(まめ)」、鬼も消え去る「魔滅(まめつ)」に通じるとして豆を窓から投げ「鬼は外」と掛け声がされたとの事だ。

だが徳島新聞のコラム鳴門で民俗学者の柳田国男さんが現在の秋田県鹿角市に伝わる民話を収集した中で、鬼婆に追いかけておさん、小僧さんに持つてこさせた節分の豆。腹に放り込めば鬼婆「人間の腹ほど恐ろしいものは無い」とおならと共に飛んで逃げた。鬼よりも人間の方がずるがしい。そんな話も数々あると紹介した。今の世も、人間とは恐ろしい生き物だと痛切に感じる事態が続発している。その人間が改心して、「鬼は外」と大声で叫ぶ時代になるように人間は持っている知恵を駆使すべきなのだろう。

大阪の一部の地域で行われていた節分に恵方(幸運を招く方向)を向き、無言で巻ずしを一本丸ごと食べる。と願う事が叶うとされたり行事は、大手コンビニやスーパーが大々的に展開した事で全国的な行事になった。大北

地域ならではの「節分の文化」を調べて見ても面白いのかもしれない。(信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上)



豆はアレルギーが心配と落花生を蒔く家庭も。皆さんの家庭は？